

筑紫氏、侍島を手に入れる

戦国時代前半の永正9年（1512）の閏4月、大内義興（筑前守護）の重臣杉興長（筑前守護代）が、御笠郡筑紫村のうち侍島12町の地を太宰府天満宮の社家の満盛院に返還しています。この侍島（侍島庄・侍島村とも）とは、現在の筑紫野市下見付近に当たると言われています。その背景には、以前に筑紫能登守（尚門か）という人物が、大内氏の味方に参じた恩賞として、満盛院領の侍島を手に入れたものの、後に息子の又次郎が敵である少貳方に戻ってしまったため、同地を大内氏に没収されてしまった、という経緯があります。

筑紫氏は、戦国時代には肥前国の東部（現在の佐賀県鳥栖市周辺）を本拠にして、境を接する筑前国・筑後国にかけて勢力を広げていた有力な領主ですが、もともと御笠郡筑紫村（現在の筑紫野市筑紫）が本領で、ここを名字として名乗っていました。能登守は侍島の地を、名字の地である筑紫村の内だという理由でしきりに大内氏に望み、

強引にこれを領有したようです。

ところが、実際のところ侍島は筑

紫村の内ではなく、永正9年に満盛院に返還する時、杉興長の家臣たちはそれを知っていたのにうっかり忘れ、間違つて「筑紫村内」と書いた文書を渡してしまったので満盛院に謝っています。恐らく大内氏側は、侍島を名字の地の内だとする筑紫氏の主張に当初は疑問を持たず、後になってそれが間違いだと気づいたのだらうと思われます。現状を地図で見ても、筑紫村があつた筑紫野市筑紫周辺と、侍島の故地とされる下見の間には宝満川が流れ、両者は隔てられています。



しかし永正16年（1519）3月に、大内義興はあらためて侍島〔下見村〕30町

地を筑紫刑部大輔に与えまして、それで以降も筑紫氏の領地として、「侍島」「志田美」の地名がたびたび史料に出てきます。侍島の地をめぐる満盛院と筑紫氏の争いは、簡単には解決しなかったようです。

【バックナンバーはこちら】

ページID7241

太宰府市公文書館

大塚 俊司